

第 16 回日本性感染症学会中国支部総会・学術講演会

■日 時： 令和 8 年 1 月 24 日(土) 14:00~17:00
■会 場： 岡山コンベンションセンター 407 会議室
岡山市北区駅元町 14 番 1 号 電話： 086-214-1000
■参 加 費： 500 円 ◆日本性感染症学会認定制度 10 単位認定

==プロ グ ラ ム==

1. 開会 14:00

2. プログラム I 14:00~14:15

役員・会員合同総会

- 1) 総会議事
- 2) その他

3. プログラム II 一般講演 14:20~

座長 島根大学医学部泌尿器科学講座 和田 耕一郎

1. 「性感染症診療におけるパートナー健診の実態と医療者の役割についての質的調査」

岡山大学学術研究院保健学域 大学院保健学研究科看護学分野 細井 舞子

2. 「よこやま腎泌尿器科クリニックにおける梅毒の現状」

よこやま腎泌尿器科クリニック 横山 光彦

4. プログラム III ミニレクチャー 14:50~

「日本性感染症学会 診断・治療ガイドライン 2026 について」

島根大学医学部泌尿器科学講座 和田 耕一郎

休憩

5. プログラム IV 特別講演 15:30~

座長 島根大学医学部泌尿器科学講座 和田 耕一郎

「性感染症の最近の話題～梅毒とマイコプラズマ～」

演者：札幌医科大学医学部感染制御・臨床検査医学講座

教授 高橋 聰先生

6. 閉会 16:30~

抄録集：一般講演（プログラムⅡ）

1. 性感染症診療におけるパートナー健診の実態と医療者の役割についての質的調査

細井 舞子¹⁾ 児玉 とも江²⁾ 佐々木 綾子³⁾ 井口（押目）奈々⁴⁾ 中瀬 克己⁵⁾ 相原 洋子¹⁾
中塚 幹也¹⁾

- 1) 岡山大学学術研究院保健学域
- 2) 岡山市保健所
- 3) 倉敷市保健所
- 4) 保健師
- 5) 吉備国際大学保健福祉研究所

【目的】性感染症診療におけるパートナー健診の実態の医療者の役割を明らかにすることである。

【方法】産婦人科、泌尿器科において性感染症診療に従事する医師および看護師（または助産師）を対象に半構造化インタビューを行った。【結果】研究参加者は医師 4 名（産婦人科 2 名、泌尿器科 2 名）、看護師および助産師 6 名（産婦人科 4 名、泌尿器科 2 名）であった。医師の平均年齢は 69.0 歳であり、当該科での平均経験年数は 42.8 年であった。看護師および助産師の平均年齢は 48.7 歳であり、当該科での平均経験年数は 15.5 年であった。医師は陽性判明のタイミングで患者にパートナー健診の必要性を説明しており、方法は口頭が多くを占めたが、資料、検査案内カードや SNS を用いている医療機関もあった。医療者の役割と課題について、医師はパートナーの情報を収集し、健診の必要性の説明および勧奨および結果把握といった役割を担っていた。パートナーが特定できない、パートナーに伝えられない（不特定多数、CSW、DV 等）、患者が話したがらないなどの課題があった。看護師は診察以外の場面で患者の気持ちに寄り添い、説明の補足、理解度の確認や伝え方の相談を行う役割を担っていた。説明するタイミングがない、説明する場所がない、忙しくて時間がない、スタッフの性感染症に関する知識が不足しているといった課題があった。本研究は 2025 年度日本公衆衛生看護学会公衆衛生看護研究助成を受けて行った。

2. よこやま腎泌尿器科クリニックにおける梅毒の現状

横山光彦

よこやま腎泌尿器科クリニック

【目的】ここ数年梅毒患者の増加が問題となっている。今回、当院で経験した梅毒患者を報告する。

【対象と方法】2015 年 5 月 1 日から 2025 年 10 月 31 日までに当院を受診し、梅毒と診断、治療した患者 323 例を検討した。梅毒血清反応はカルジオリビンを抗原とする非特異的な RPR 法（メディエース RPR™）と梅毒特異抗体検査 TPHA 法（メディエース TPLA™）を用いて診断した。【結果】男性 315 例、女性 8 名、年齢：18 歳～78 歳（中央値 36 歳）、潜伏梅毒 38 例、第 1 期 232 例、第 2 期 52 例、交渉相手は、風俗店利用 178 例、知人 61 例、彼女（彼） 44 例、いきなり SNS など 33 例であった。受診時にクラミジア合併 42 例、淋菌合併 6 例、淋菌クラミジア同時合併 4 例、ヘルペス合併 4 例、コンジローマ合併 4 例、HIV 合併を 2 例に認めた。尿道炎などの性感染症の既往がある患者が 113 例 35% であった。また 2 回目の感染が 9 例、3 回目の感染が 1 例であった。初診時 RPR、TPHA とともに陰性 11 例、RPR 陰性、TPHA 陽性 38 例、RPR 陽性、TPHA 陰性 1 例であった。治療は 225 例にアモキシシリソル 1500mg/day を投与、98 例にペニシリン持続性筋注製剤を投与した。84 例 26% は投薬後に再診がなく、内服 4 週あるいは筋注投与後に治癒確認の前に自己判断で再診がなかった患者は 33 例であった。【まとめ】症例提示するように梅毒患者の局所所見は多彩であり、感染初期には梅毒血清反応が陽性にならない症例も存在するため十分な説明が必要となる。また投薬後に再診しない患者も 多数存在するため注意が必要である。